

巻 頭 言

科学論文の役割と研究倫理

明倫短期大学 学長
宮 崎 秀 夫



学術論文は科学的手法により真実を究明することを目的とする。歯科技工学や材料学の分野にみられる実測的な解析結果に異を唱える機会はそう多くないと思われるが、歯科衛生学など人を対象とする臨床研究分野では議論の余地がない結論を導き出すことに限界がある。すなわち、その研究論文で求められたデータは絶対的真理を示すのではなく、新知見として「今まで信じられてきたこと」より論理的にうまく説明がつくということではないのかも知れない。複雑な社会環境の中で営まれている生体活動の多様で複雑な反応が一つや二つの研究モデルで、数学のように完璧に証明できることはあり得るはずがない。だからこそ、今まで信じられていたことが、ある日、ひとつの論文によって覆されることは珍しくないのである。とすると、今や「嘘」＝「間違った結論」となってしまった論文はほんとうに嘘の論文であったかのように思われるが、決してそうではない。それまでは本当だったのである。そして、この理論（推論）が正しいというコンセンサスを得、これまでの科学界の常識を覆した最新の論文も、いつの日か「時代遅れ＝間違った結論」の論文になってしまう日が来ることを覚悟しておかなければならない。

それでは、「本当」の論文が公表されるまでじっと待っている方がよいのかというとそうではない。みんなして何もしないと、今でこそ「嘘」の論文となったものが出ていないわけであるから「本当」の論文が出現することはなかったかも知れない。一つひとつの理論の積み重ね、時には解釈を誤った論文が出現するというプロセスがあればこそ、「本当」の論文ができ上がると考えるならば、今や「嘘」になってしまった論文も必要なものであったとみるべきである。

研究倫理を遵守できない者が排除される理由は明らかで、データ捏造を始めとする「本物の嘘」を公表するからに他ならない。先述した科学がアップデートされるプロセスとして通過せざるを得なかった真理に到達するプロセスを、完全に異なる方向にベクトルを向ける情報として研究者仲間にインプットさせる罪は極めて大きい。何より、失った貴重な研究時間という意味でも、（医学研究であれば）誤った治療ガイドラインによる治療を行ったという意味でも取り返しがつかないことである。人を対象とする研究倫理審査では、個人情報保護と生体侵襲性の有無を主に、対象となるボランティアからインフォームドコンセントを受けて行う計画となっているかどうかの視点を重視されがちであるが、それ以前に、意義ある研究であるか、目的達成のために適切な方法が選択されているかどうか審査されるということを肝に銘じておく必要がある。

本研究紀要は、医療者や研究者としてのスタートアップ研究の発表の場として利用価値が高い。行おうとする研究課題に対して、関連する先行研究のバックグラウンドをしっかりと把握した上で研究計画を立案する意味は、直接的には完成した投稿論文が査読者・編集者により受理判定を受けるためであるが、意図しない「本物の嘘」を公表しないためでもある。文献検索と概括、選択された論文の詳読に多大な時間を費やして始めて、仮説を証明するための最適な実験計画・研究方法を組み立てることが可能となる。